

## 高橋康雄氏のメディア史論

——『メディアの曙』『物語・萬朝報』『超コミュニケーション論』を中心に——

石塚純一

高橋康雄氏は、その生涯に二七冊の書を著わされた。『比較文化論叢』には創刊以来毎号一〇〇枚を超える論考を發表され、遺稿となった「遠野物語のリアリティー」一〜四（未完）をはじめとして、次なる研究のために収集を終えたいくつかの大部の資料ファイルが残されていた。大学に籍をおいて、まさにこれからじっくりと本格的な仕事に着手しようとされていた矢先の死であったことをこれらの資料は物語っている。

本稿は、道半ばにして倒れた高橋氏がのこした幅広い独自の仕事のなかから、メディアに関連する著作を読み直し、その仕事の意義を振り返ろうとするものである。本来ならば、詩作から児童文学、文学と民俗学、神話学、広告学といった広い領域にわたる仕事の全体の中にメディア論を位置づけて論じるべきだが、私の力量に余ることなので、いまはこの範囲にとどめることをご容赦いただきたい。

高橋氏のメディア史関係の著作は、およそ四本を数える。年代順に挙げれば、『夢の王国——懐かしの少年倶楽部

時代』(一九八一年、講談社)、『物語・萬朝報——黒岩涙香と明治のメディア人たち』(一九八九年、日本経済新聞社)、『メディアの曙——明治開国期の新聞・出版物』(一九九四年、日本経済新聞社)、『超コミュニケーション論——新メディア考』(一九九五年、三二書房)である。ここでは、私自身が深い関心を寄せている明治時代の新聞・出版について書かれた『物語・萬朝報』『メディアの曙』と、『超コミュニケーション論』に焦点を当てる。これらは、氏が「TBS調査情報」編集部や「俳句朝日」編集部に在籍されていた当時、激務の合間に執筆されたものである。

### 一、活字をめぐる新聞・出版人の群像——『メディアの曙』

本書は、一八六四年(万延元)から八八年(明治二〇)ころまでの新聞・雑誌・書籍・辞書といったメディアの歴史をテーマとする。高橋氏はこの時期を近代メディアの草創期と位置づけ、前代との違いを特徴づける活版印刷の成立を軸に、情報伝達の速さに賭けた人物群像を描きだそうとしている。すでに江戸時代に瓦版も書籍も辞書もさかんに刊行され、整版(木板)技術も確立し、明治初期にはこうした旧技術と新たに移入された活版印刷術とが並行して行われていたが、金属活字が優位に立つ道のは平坦ではなかった。新しいメディアに期待をかけた人々たちの前に立ちふさがった困難はいかようなものであり、それはどのように確立されたのか、情熱を傾けた人々は蘭学者なのか武士なのか出身は?、スピードに象徴される近代への転換点を活字メディアの成立に見ようとする試みである。

印刷文字はいまや私たちの身の回りにあふれ、新聞雑誌は日常のものとなっているために、改めてこのことを考

える機会は少ない。そのせいかメディア史や印刷史の研究はそれほど進展しているとはいえない。明治のメディア史でいえば、検閲などの制度史や言論史的研究は行われてきたが、個別の新聞や出版メディアの歴史的・文化的な研究は、大新聞の社史などを除けば史料の蓄積、公開も充分とは言えない状況である。まして印刷術の歴史はメディアを支えた重要な部分であるにもかかわらず、日本において活字がどのように成立したかも未だにはつきりとはわからず、ようやくいくつかの研究が発表されるようになったところである。<sup>\*1</sup>

そういう意味で草創期のメディアと技術について、通史的に綴った本書は未開拓な分野に足を踏み入れ、個々に調べられた事実の断片をモザイク風に集めながら全体の流れを示した画期的な著作といえることができるだろう。著者の意図もそこにあつたものと思われる。先にも指摘したが、本書においても特徴的なことは、メディアの歴史を「活字の成立」過程を軸に組み立てようとしている点である。

一八六四年（元治元）ヘボン（一八一五～一九一一）と横浜で出会った岸田吟香（一八三三～一九〇五）は、ヘボンに頼まれて『和英語林集成』（一八六七年）の編集・製作に奔走する。活版印刷機と活字を求めて、江戸の開成所をはじめとしてあちこちへ探しまわる。しかし、日本では印刷機はあっても活字が揃わない。上海ならばと聞いて海を渡り、英字と漢字の活字印刷が可能なることをつき止め、ここで制作しようとしたがカタカナ活字がない、そこで吟香はみずからペンをとってカタカナ活字のための版下を書いたことが紹介される。また柳川春三が一八六八年（慶応四）に横浜で発行した日本最初期の新聞『中外新聞』について、高橋氏はこのように述べる。

木活字の『中外新聞』は、なかなか整った明朝体である。行間といい、字間といい整然として乱れが見られない。これまでの瓦版のみみずのような木版の、どこまでもつながった文字の鎖がぶつぷつと切れた、この新聞は一字一字が独立していた。この感覚は新聞というものが第一義とする、報道という意識をより鮮明にした。西欧のニュースと同じく活字を用いて迅速性を模倣したわけだが、人々は無意識のうちに木活字をとおして、その報道の迅速性を感受していたはずである。一個一個の文字に速報の使命がこめられていた。

木活字とはいえ、ここには活字というものが、単に新しい技術であることをこえて「ぶつぷつと切れた」すがた・イメージとして捉えられ、これからはじまるスピードの時代を象徴するものであったことを言い当てている。活字は大いなる武器であった。金属活字の創始者といわれる本木昌造（一八二四―七五）の神話化を冷静に排しながらも、彼の努力の跡を丹念に追い、その熱誠の原動力がどこにあったかを探る。経世家林子平が『海国兵談』上梓に関わる印刷費用の内訳を記した文書を掲げ、総紙数三五〇枚を木版で印刷するのに現代とは桁違いの費用を要し、予算の関係で板刻に一千六十日も費やさなければならなかった事実を指摘。現実の焦燥感と悠長な木版印刷のギャップを子平ら経世家が感じていたことを長崎で通辞をしていた洋学者昌造が想像し、それが活字開発の熱意につながったとする。「『きつと活字は新しい連続を生み、新しい時代の夜明けを導く』昌造は我が家の研究室で、まだ見ぬ活字の夢の世界にまどろんでいた」と高橋氏は想像する。このような個所にこの著作のすぐれた特性を見出すことができる。つまり林子平が『海国兵談』を著し、幕府の咎を受けて蟄居、版木を没収された時代は一七九六年（寛政四）のことで、本木昌造の時代とは隔たりがあるが、昌造は同じ洋学を学ぶものとして蘭学者たちが熱

望していたものを理解したはずだとの「文脈」を高橋氏は発見する。事実と事実の断片を想像力で結び、ひとつの物語を生み出すのである。

活字を使ってコミュニケートしようと苦心惨澹した人物として、岸田吟香、本木昌造のほか丸善の早矢仕有的、佐久間貞一らを取りあげる。西欧に倣って活字を鑄込むこと自体にそれほどの苦勞はなかったが、アルファベットと違って一万字以上の数を揃えなければ新聞を印刷することはできなかつたし、漢字とカタカナの活字寸法を揃えること、行間・字間の詰め物を用意することなど、速報性を求める新聞紙発刊のもくろみと初期の印刷術の間には大きなギャップがあつた。活字の値段は四号活字一本六厘、職人は一日二百本作ることができるので悪くない収入だつたことなど細かい事実も興味津々である。本木昌造は活字の号数基準まで作成しながら事業的には挫折し、後を弟子の平野富二に託し、平野が築地活版所を設立する(明治六)。そのころ創刊された『東京日々新聞』との共同によつてようやく平野らの築地活版所は成功の道を歩み始める。また、佐久間貞一(一八四八〜九八)は自ら活字の文選もしながら秀英社(のちの大日本印刷)を設立(明治九)。当時、組版印刷は木版彫刻に比して高くつき、注文も少なく経営は火の車だつたが、話題をあつめていた『西国立志編』(スマイルズ著・中村敬字訳)の再版をぜひ活版でやらせてほしいと中村に懇請、了承が得られ初めての活版洋装書籍を印刷する。このとき活字は間に合つたが、洋装本にするための板紙(洋紙)が無く、限られた期日までに板紙をつくるための悪戦苦闘がつづいたという。幕末から明治一〇年ころまでの、このような活版印刷の成立過程に『横浜毎日新聞』(明治三)『東京日々新聞』(明治五)『日新真事誌』(明治五)『郵便報知新聞』(明治五)『朝野新聞』(明治七)『読売新聞』(明治七)の発刊を位置づけてみると新聞史の別の様相が見えてくる。高橋氏は、田口卯吉、佐久間貞一、沼間守一、中村敬字らに

ついで「活版文化の担い手は時の政府でもその息のかかった連中でもなく、旧幕臣たちの同志意識であったことは無視できない」と指摘する。近代メディアの推進者たちは薩長閥の権力に支えられて登場したのではなく、むしろこれに反対する勢力から出てきたというのである。これは山口昌男氏が『敗者の精神史』（一九九五年、岩波書店）や『内田魯庵山脈』（二〇〇一年、晶文社）で一貫して追究している、日本近代史が見逃した隠れたネットワークの発見につながる問題でもある。

さらに高橋氏は本書の最終章「言葉の改革者たち」で重要な指摘を行なっている。明治初期の注目すべきメディアとして、「演説」や、口話コミュニケーションを文字に橋渡しする「速記」について叙述した後、山田美妙や二葉亭四迷の言文一致には三遊亭円朝の速記録の読み物の影響があるといい、「言文一致の形成過程は印刷における約物（活字記号）の創出と見合っている」と述べるのである。話し言葉を文字にするためにはさまざまな工夫が必要だった。今ではあたりまえのこと、中学校でも教えられる「作文の書き方」の約束事はこの活版印刷の成立時代にはできあがったというのである。句点（。）は木版の時代から定着していたが、括弧（「」）、ルビ、リーダー罫（……）、ダッシュ（——）、パーレン「（）」などの印刷約物は言文一致小説とともに成立したのだ。印刷は近代産業の一つとしてもつばら技術的な発展面を強調されるが、それを構成した一つ一つの部品や道具、印刷によって生まれた機能やイメージは、文化のアルケオロジーの大切な要素でもあることを教えられた。

## 二、一つぶの原理でメディアが輝く時——『物語・萬朝報』

『物語・萬朝報——黒岩涙香と明治のメディア人たち』（一九八九年、日本経済新聞社）は、先に紹介した『メデイ

アの曙』より以前に刊行された本である。『物語・萬朝報』は明治二〇年代、三〇年代の出来事をテーマにしている。ここで、ここではまずメディア草創期を扱った『メディアの曙』を紹介し、活版印刷が軌道に乗り明治初期の主要な新聞が出そろった後に登場する『萬朝報』の歴史につながるように話を前後させた。

本書はサブタイトルにあるとおり、黒岩涙香（一八六二～一九二〇）が発刊した新聞の成り立ちとそこに記者として集まった人物たちの足跡を微細にたどっている。『萬朝報』は一八九二年（明治二五）に創刊され、一九四〇年（昭和一五）まで四七年間続いたが、本書の中心は黒岩涙香による『萬朝報』の発刊から、異色の人材が結集した日露戦争開戦までの一二年間余りに置かれている。高橋氏の執筆の態度は、『萬朝報』記者として綺羅星のごとく集まったジャーナリストや文人たち一人一人に関する研究や資料をもとに、彼らが朝報社の歴史にどのように絡んでいくかを物語として描く立場をとる。

黒岩周六（涙香）は、一八六二年（文久二）、土佐の郷士の家に生まれ、大阪専門学校（旧制第三高等学校）に入学、英語を学び弁論や文筆で早くから活躍、薩長閥で固められた政府を徹底批判し、自由党に近づくがさりとて一定の距離を保ち、学問と言論で立とうと志す。翻訳小説家として早くから頭角をあらわし、人気作家となる。その若き涙香が仲間と語らって『萬朝報』を発行するくだり、「発刊の辞」を引用した後、高橋氏は次のように記す。

この論説の一文は朝報の明確な立場を示している。一朝に千金の巨利を博する豪商は友にあらず、毛を積んで厘を重ねて銭となす孜々と勤勉な良民こそ我が友であることを打ち出している。『萬朝報』の名を高めるのみならず、この自立の思想には期して待つべきものがあることを世に示した。

正義は行われるところに意義があるので、掲げることに意義があるわけではない。正義とは金科玉条のごとく口に唱えることではなく、実行することにこそあることを、青臭い人間にはなかなか理解できないものである。(中略)

新聞発刊までの短日の間にも記者たちにさまざまな教訓を与えたが、なかでも熱意の何たるかを周六は叩き込んだ。「『萬朝報』の記者は物が出来るよりも熱誠があればいいのです。憎まれ者でもよい。角のとれていない者でもよい。敵が多くてもよい。仕事が出来る者には敵が多いし、排斥もされるものなんだ」

まさに、この言葉どおりの人間たちが朝報社に馳せ参じた。「周六のように人を見る度量がなければ幕下になど収まりきれない人材ばかり」だった。新聞発刊後、反骨精神と涙香(周六)の翻訳小説への人気で順調に部数を増やしていったが、数年後に周六は新しい実力をもった記者を集めはじめる。このあたりから本書の本領が発揮される。

#### 森田思軒、内村鑑三、田岡嶺雲、斎藤緑雨の入社

「よろず文学」欄を担当した原抱一庵(明治二九年入社)、英文担当の山縣五十雄(同年入社)、つづいて後に辣腕編集長としてならした森田思軒(同年入社)、彼らは英文小説などの翻訳者として、また記者としてすでに実力を認められておりいわば引き抜かれた形である。森田思軒は「入社初めに当たりて」と題して読者にメッセージを送った。掲げられた一部を紹介すると、



萬朝報は成功の新聞紙なると同時に亦た進歩の新聞紙なり其の日から将来に期する所は決して区々たる今日の小成功に止まらず即ち朝報の将来に為す所はさらに今日に十倍百倍し朝報の戦線は更に今日に十倍百倍して伸長展開せざるべからず戦線既に伸長すれば其の戦員亦た増添せざるべからず余無能といえども諸君の後へに従ひて以て奮励努力すれば希はくは其の方面の戦員の一に備はることを得むか

明治三〇年には、内村鑑三が入社、英文欄の主筆となる。鑑三は社説にも筆を執った。朝報が一貫してつらぬいた薩長政府批判を鑑三も継承し、歯切れのよい文体で読者の喝采を浴びた。「今や区々の改革を唱ふるも要なし、社会の病原は薩長政府其者にあり、確信此に及ばずんば、枝葉の改革は徒勞たるのみ（後略）」。引用に続けて高橋氏は書く。

鑑三の堂々たる警醒の論調は朝野を震撼させた。そんな痛烈にして縦横無尽な鑑三の筆誅をおそれる輩から先についた国賊の汚名をぶり返され、いやがらせを受けることも少なくなかった。しかし、『萬朝報』の声価は日増しに高まり、その尽力に対して周六も大いに喜んでくれるのだった。

同年、田岡嶺雲も記者として列に加わった。文芸批評と時事短評を担当した嶺雲について高橋氏は、プライドが高く精勤ぶりを問う出勤簿には断じて捺印しなかったと紹介し、「熱情の詩人たる嶺雲には、もともと社会の罪悪を見抜く操觚者の眼力がそなわっていたのを見逃せない。『下流の細民と文士』では早くも下層社会の悲惨な運命に目

を注ぎ、ユーゴーのごとく無告の民のために憤り、代わって天下に訴えよと記し」たと紹介する。

明治三十一年の年頭には「気骨ある天才的文学者」斎藤緑雨が入社。「眼前口頭」というアフォリズムの連載を始めた。緑雨を評して高橋氏は「緑雨のイロニーは彼が常識に富み、風雅を愛したからこそそのものである。(中略)緑雨に反発した人がいるとすれば、彼は自ら緑雨の攻撃とならねばならぬ虚偽の世界の住人であったのだ。おそらく一党一派の首領たる者ほど緑雨の鋭利な毒舌を『シニカル』というレッテルを貼って排斥し、その実内心は恐れていたのではなからうか」と述べる。また「彼は学閥、文閥にも無縁であった。放浪の人・嶺雲も某派や某社の麾下に参加しない点では同じであった。鑑三もまた協会から一切の援助を拒み、無教会の独立自尊を貫いていた。彼らの拠点・朝報社も決して保護者を求めようとはしなかった。藩閥政府と闘って腰砕けにならないのは、自立の潔白を貫いたからである」と記す余白には、メディアとしての『萬朝報』の独立性とそこに集まる異色の記者たちに対する、高橋氏のあるべきと共感が表われているような気がする。

#### 高浜虚子、幸徳秋水、内藤湖南、堺利彦の入社

三十一年には、さらに俳句欄を担当する弱冠二四歳の高浜虚子、涙香と同郷の幸徳秋水、内藤湖南が入社した。秋水の筆誅第一弾は伊藤内閣へ向けられ、頻繁に論壇に登場し、気を吐くことになる。鑑三は病のため一旦朝報社を辞める(後に復帰)。その「退社の辞」を引いて、「『平民の友たるは常に自身平民の資格を守るにあり』の発言には、平民社の先鞭を見ることが出来る。その平民の世界へ沈潜するべく打って出ようとする志がきらりと光っている。朝報社に集まった記者たちを『萬朝報社は世の不遇者の結合体なり』と表現しているが、これもいい得て妙である」

と高橋氏は記すが、本書を読み進めるとメディアには「理念」が欠かせず、意気に感ずる同志的結合こそ力であることに私自身同感する。このころ『萬朝報』は発行部数東京一位から全国一へと駆け上がる。会社の組織化をそれほど図ることもなく、周六のアイディア勝負に賭けてきた朝報社の人気は、これらの気骨ある記者たちの梁山泊的な結合によって保たれていたのだろう。

三二年には、若き堺利彦が入社。三五年には、後年アナキストとして知られるようになる石川三四郎が入社し、周六の理想団の秘書役を勤めることになる。しかし、日露戦争の開戦をめぐって、萬朝報の論調は二分されていく。社内の大勢を占める主戦論的記事と、鑑三・秋水・利彦の非戦論である。「朝報社はこうなると、呉越同舟を自ら世間にさらしているようになっていたらくだが、朝報社自体が一つの世間であることをあからさまにしている点は高く評価すべきかもしれない」と高橋氏は書く。時の流れは開戦派を力づけ、非戦派は沈黙を余儀なくされ、ついに三六年六月に鑑三、利彦、秋水は退社を申し入れた。鑑三の「退社に際し涙香兄に贈りし覚書」を掲載、これに対して周六は「内村、幸徳、堺、三君の退社に就いて」を記して惜別の情を述べた。引用された両者の記事はどちらも感動的なのだが、長いので省略する。それを受けて高橋氏はこの事情を次のように書く。

周六にとっては『萬朝報』を創刊して以来の隠忍自重を強いられた時であった。口を酸っぱくして藩閥政府の非をとがめてきただけに、その志を遂げぬまま、政府をバックアップする形で日露開戦へと立ち向かわねばならない自己矛盾をいやというほど痛感していたのは、周六自身であっただろう。ある意味では変節の踏絵を前にしたようなものである。経営者の見地に立てば非戦論では部が悪いことは誰が見ても明らかだった。(中略)周

六は志士の立場を思い描いて最高の送別の辞をはなむけにしたためた。

『萬朝報』は警察当局から「梁山泊」と呼ばれ、幾度かの発行停止をくらった。経営者の周六は一人一人の記者の主義と人格と独立性に信頼を寄せていたし、言論の府として一人一人の人格を尊重した。「統一による停滞よりも不統一（混沌）の活気を肌身に感じていた異才なのだ」と高橋氏は語っている。

「小新聞」『萬朝報』が帝都一の発行部数を誇るまでにいたった理由は、このような壮士たちが健筆を振るったからとは必ずしもいいきれない、高橋氏も書くように黒岩涙香の翻訳小説『鉄仮面』や『巖窟王』『噫無常（レ・ミゼラブル）』などが圧倒的な人気で迎えられたからといっても過言ではなからう。小説で新聞を選ぶ時代があったことも興味深い、それにしても社会主義者から、東洋学者、文学者、俳人それも一流の人材が朝報社に集まったことは一驚に値する。かれらはまだ若かった。それぞれの仕事で一家を成す前の一時期の腰掛けだったかもしれない。しかし、彼らに若き新聞記者時代があったという事実と、『萬朝報』というメディアが持っていた反薩長政府という原理に共振する人々の集散は偶然ではなかった。各人の伝記的知識として、たとえば幸徳秋水が平民社を設立する前に『萬朝報』にいたこと、内村鑑三全集のなかに『萬朝報』の記事が収録されていることなどを私も知っていたが、朝報社の歴史と黒岩涙香の足跡を中心軸に定めて、この舞台に次々に登場させた群像はまた違った相貌を見せる。その手並みは新鮮でみごとである。薄汚い新聞社の一室に、斎藤緑雨と幸徳秋水と内村鑑三が席を並べていたことを想像すれば、思わぬリアリティを与えられるのである。またこの方法は明治期の新聞メディアを叙述するひとつのスタイルとして成功している。人物とその関係と主張、新聞社の組織と時代を同時進行的に描くスタイルで

ある。高橋氏は『メディアの曙』と同様に本書でも、小さな断片的事実を重ね組み合わせることによって、明治二〇〜三〇年代の一メディアの全体的見通しを与えてくれた。その方法はタイトルにもあるように、「物語」であった。高橋氏の「物語」の方法とその意義については、後に彼自身の言葉を手掛かりに考えてみたい。

### 三、大切なのはリアリティー——『超コミュニケーション論』

『超コミュニケーション論』（一九九五年）は、学生を意識したマスコミ論の入門書といえる。文化としてのコミュニケーション理論を、E・T・ホール『沈黙の言葉』、D・リースマン『孤独なる群衆』、M・マクルーハン『人間拡張の原理』の紹介を通じて論じたのち、現代のTV、広告、出版、新聞、ニューメディアをめぐる諸問題をテーマとして掲げ、論じるものである。巻末に付された「メディア・コミュニケーション関係文献および図書館案内」は、彼が作成した『危機と文化』巻末の「比較文化のコンセプト」参考文献一覧と通底する、適切かつ親切なビブリオグラフィとしていつまでも評価され続けるだろう。

高橋氏は本書においてマスコミが置かれている現在の問題点を柔軟な思考で批評するが、氏自身の考え方を投げ出すように率直に語っていることが特徴である。

たとえば、彼の現代政治に対する見方、真理・徳性・正義の党派性にたいする服従から解放されなければならないという主張が率直に語られる。M・ポランニー『暗黙知の次元』にふれたのち、「世界だの宇宙だのと風呂敷を広げる手合いは「革命」から最も遠い、ただたんに言葉の観念の回りを巡回する時代錯誤でしかない。政治の世界、宗教の世界がもつとも時代に逆行している。新・新党などという政策に雲泥の差がある党派が「団結」したところ

で古傷をなめあい、悪行を隠蔽しあうだけ」と九五年当時の政治状況を批判し、ポランニーの言う「小さな領域に限定された責任を選ぶべきである」という立場を支持する。細部へのこだわり、断片をつむぎあげることの大切さは本書の各所で述べられている。非言語から言語文化への進化というのは錯覚に過ぎず、文字による表現を絶対視しない立場も随所で表明される。

「活字離れ」についての考察では、「『散文』『本』には読者に何かを押しつける語りかけが溢れている」、散文・本は、読者が参画する領域がほとんどないホット・メディア（マクルーハン）であり、「箴言」というクール・メディアとは区別される。スピノザ、パスカル、ニーチェ、ヴィトゲンシュタイン、稲垣足穂らの作風は箴言的であり、構築したものを与えるのではなく、フラグメントに読者が触れることによってみずから哲学を構築しなければならないスタイルをもつという。「いわゆる「本」は哲学・小説の塊を最初から構えているが、箴言的なる断片の世界はテレビやコミックの「モザイク」性を帯びているため、自らが一片一片をたくり寄せて哲学しなければならない。受け手に参画を強く要請している。送り手は考える材料を提供し、受け手が答えを導く」とつづけるように、ここには高橋氏の書物に対する姿勢があらわれている。

これは氏自身の著作にも通じる。つまり、説明的でなく教訓を嫌い、結論が決まっているような書き方ではなく、何かを説明しようとする探求の精神を保ちながら、モザイク性に富んだ素材（資料）の提示と、それとの対話という姿勢で論が展開される。先に紹介した『メディアの曙』『物語・萬朝報』についても、その他の著作においてもその精神が貫かれていることがわかるだろう。部分を大切に扱いながら、それによって全体を開示しようとする、全体と部分の往還的な方法である。高橋氏の著作は平易な文体で綴られるが、必ずしもわかりやすいものではない。部

分へのこだわりが、結論を急ぎたい読み手にとっていらさせられることがあるかもしれない。しかし、『メディアの曙』に見るように黎明期のまだ解明されていない「活字」の技術的細部に関する断片を丹念に集めながら、それに関わった人物群を媒介項として描く明治初期のメディア像はたしかな全体的視野をもっている。『物語・萬朝報』でも、いまや失われた一新聞が最も輝いていた時期の個々の人物の行動や言論を一つずつ拾い集め、新聞というのが原理的に有していた共同の精神の貴重さを具体的に示しながら、日清日露戦争を経て近代の日本社会が変貌していく「時代」を見事に描き切る。決して声高に新聞の使命を唱えたり、明治文化の歴史的変質を論じるわけではない。ここに高橋氏の仕事の本領を見ることが出来る。

最後に、フラグメント（断片）の重要性を語り、それにこだわった高橋氏が全体への意志をどのように表現しようとしたかを考えてみたい。それは「物語」という手法にあったのではないか。『メディアの曙』のサブタイトルには「明治開国期の新聞・出版物語」とあり、『物語・萬朝報』も物語である。これは、自分が書くことは「フィクション」なのだといっているのだろうか。そうではあるまい。今まで紹介してきたとおり、著作には資料の紹介と事実がぎっしり詰まっている。当該の新聞雑誌記事の引用、先行研究の成果を「部分」として積み上げ、想像力によって部分と部分の間隙を埋め、まだ誰も手がけていないメディア史の全体を示そうと試みた結果なのである。

高橋氏は『超コミュニケーション論』において、ノンフィクションという手法について各所で言及している。「ドキュメンタリーにはあらかじめ答えがない。事実という点をいくつも追い掛けながら点を線にしていく作業」だとし、事実謙虚に立ち向かうべきことを強調しながら、ノンフィクションの手法には「事実と真実の間で人為が入るジレンマをくぐり抜けなければならない宿命がある」と述べる。そしてノンフィクションであることをことさら

強調していかにも事実であることが正しいことであるかのように主張する傾向に対して疑問を呈する。「優れたノンフィクションはかぎりなくフィクションのなかにまぎれこみ、虚と実の見分けがつかなくなることを忘れてはならない」「大切なのはリアリティーであって、ノンフィクションあるいはフィクションという枠ではない」という言葉に彼の対象に迫る態度と著作の方法があらわれている。事実を単純に実体化するだけでは何も生まれない。事実と事実との関係性を問い、一つ一つが何を象徴し、どのような徴候を示しているのかを、精神史として考察することの重要性、タイトルの「物語」にはそういう意味が込められていると思うのである。

高橋氏の著作は、メディア史研究の「論文」として必ずしも正当に評価されて来たわけではない。しかし、未開拓といつてよい近代日本の草創期の新聞・雑誌・出版のうす暗い領域に、高橋氏の仕事が一つの窓を開けたことは間違いない。めざすのは出版史でも、マスコミ史でもない、人間をテーマとする領域を超えた文化史なのであり、ノンフィクション（論文）か物語かといった枠組みの問題ではなく、リアリティーの問題なのである。

## 注

\*1 高橋氏は本書のあとがきで、活字の先行研究者として矢作勝美、府川充男、佐藤敬之輔、鈴木秀三郎各氏の名を挙げ謝している。近年の総合研究の成果には、西野嘉章編『歴史の文字——記載・活字・活版』（一九九六年、東京大学総合研究博物館）がある。

\*2 活版洋装書籍が和本と平行して刊行されていた状況については、拙稿『「うさぎ屋誠」考——明治初期のある出版人をめぐって』（『比較文化論叢』5号 二〇〇〇年）でもふれた。